

大博物館だより

NO. 56
2007.10

津山郷土博物館

まず粘土で土器と土笛の形を作りました。



縁(ふち)の細工で見栄えが違ってきます。

直焼きする前に、土器を火の周囲に並べて乾燥の仕上げをしました。



(P. 4に子どもたちの感想文あり)

平成19年度の郷土博物館子ども歴史教室「弥生土器づくり」は、7月20日(金)と、8月10日(金)の2日間、実施しました。猛暑のことしの中でも特に暑い日で、大人も子どもも、みんなバテバテでした。



焼き上がり。
まだ素手で触るのは熱すぎるよお。

当館所蔵 「西東三鬼文庫」

について



▲三鬼、16歳位。上京前。
津山市南新座の生家前。



▼三鬼、2歳9か月。
長兄、武夫の膝の上で。



▲三鬼、2歳10か月。
右手首骨膜炎に罹り、片腕切断を宣せられたが、父の懇請により危うく助かる。

▼右から母・登勢、三鬼、謙(長兄の子)



西東三鬼は、近代、津山の生んだもっとも著名な作家の一人といえるのではないだろうか。

津山郷土博物館の前身、郷土館時代に、ご遺族から三鬼の蔵書が津山市に寄贈されており、いまの郷土博物館に収蔵されている。これも一般にほとんど知られていないが、1,000点以上の雑誌、書籍などの貴重なものがあり、三鬼自身が編集した最初期の「天狼」「断崖」「激浪」、角川の「俳句」誌など、本人生前の第1級資料ばかりである。

この蔵書一覧を見ると、三鬼という人の内面が分かり、楽屋裏を覗くようで大変興味深い。もし、本人が生きていたら、覗くのをやめてくれというかもしれない。

意外なことがいくつかある。俳句関係のものが多いのは当然だが、宇野浩二の本が目立つ。夏目漱石も好きだったようで、個人全集はこれが唯一だ。哲学書、特に実存主義のものが多い。俳句関係では山口誓子を除いては石田波郷が多い。津山市に寄贈されているのが蔵書のすべてではないだろうが、民間会社の社内報など、自分が関与した名もない小雑誌なども律儀に保存してある。「女たらしの遊び人」というイメージが強い三鬼だが、貧乏人に優しくったという三橋敏雄や鈴木六林男の、嫉妬に近いような証言も、肯ける。

三鬼は、歯科医専を卒業してすぐにシンガポールで歯科医を開業していただけに、英語は得意だったらしく、英書も何点かあるが、ほとんどジョークやユーモア系のもばかりで、人気者三鬼の知られざる秘密の種明かしを見るようである。

自伝といえる「神戸」「続神戸」「俳優伝」など、散文作家としても第1級の文章を残している三鬼だが、性格的には趣味で蔵書をもったり、誇ったりするような人ではなく、所有している本はほとんど実際に読んだ形跡がある。

五木寛之は三鬼のことを「ドストエフスキー的人物」といっているが、三鬼の蔵書に「カラマーゾフの兄弟」と「悪霊」の岩波文庫版があつて、実際愛読していた形跡がある。

津山市の出身で、関西学院大学文学部の哲学教授、のちに院長も務めた故久山康氏は、大正6年の生まれで、三鬼より17歳歳下であるが、京都帝大時代いわゆる「京大俳句」に関係し、昭和12年12月19日、京大俳句5周年記念大会の俳句の寄せ書きに、三鬼と一緒に名前が載っている。

日本のケルケゴール研究では先駆者の一人だった久山教授の愛読書の一つが岩波文庫の「カラマーゾフの兄弟」で、よく読みこんだらしい薄汚れた本を授業に持参し、舐めるようにページを繰っておられた姿を筆者（佐野）は記憶している。同じ津山市出身（久山教授は津山市二宮の出身）で、同じ「京大俳句」に関わった両者が、同じような薄汚れた岩波文庫の「カラマーゾフ」を読んでいるのを想像すると、この時代の思潮というもの、そして、片や「キリスト教哲学教授」、片や「俳壇の寵児」と、小さな文庫本という組み合わせに、ほのほのとしたものを感じる。とはいえ、「カラマーゾフ」は世界文学史上もっとも深遠な内容をもつ小説のひとつではあるが。

ちなみに、寄せ書きの三鬼の句は「算術の少年しのび泣けり夏」、久山康氏の句は「梅雨の夜男轟く風呂の戸に」である。

三鬼は、サルトルよりもカミュを好んだらしい。ハイデッガーやヤスパースの本もあり、何を思ったのか



▲右端が三鬼。「赤道直下の乳香と没薬の国」シンガポール時代。

ケルケゴールの名のついた本さえある。いまでは実存主義などと十把一絡げでいわれるが、戦後まもなくのころとすれば、かなり早い時期の読者だったのではないだろうか。フロイトもよく読んでいる。

寒夜明け赤い造花が又も在る

という句が実存主義の句であるといわれたこともあるらしいが、間違っているだろう。

この句は、津山市の宮川にかかる城北橋の柱に、自筆のものが刻まれている。

三鬼関連の資料は、蔵書ばかりではなく、手紙、色紙、短冊、自筆原稿、写真、愛用の文具なども当館に所蔵しているが、一部常設展示のほか、ほとんど市民の目に触れる機会がない。これらの公開も、津山郷土博物館の課題の一つである。（佐野綱由）



▲WINNER K.SAITOH 1928 の刻印のあるビールジョッキ。シンガポール時代、昼はゴルフ、夜は中東の友人たちとの交遊に明け暮れていた。



▲三鬼筆、皿。「白馬を少女瀆れて下りにけむ 三鬼」



▲三鬼筆。「かまきり」

▼三鬼筆。「銀座のバーの女」。唇にこだわっている。





猛暑の中、弥生土器づくり 「あっちっち！」

「おもしろそう！」と思ってやってみた弥生（土器）作りですが、「さあ、やってみよう！」と始めてみると、すくかわいちゃって、バラバラくずれてきちゃって、外側はポロポロになってしまいました。水を指につけて、ペタペタやっていると、けっこうきれいになってきました。私は鉢みたいなちょっとゆがんだものを2つ作りました。むずかしかったけど、友達もできたし、楽しかったです。焼く日は、もうかんかんです。すごくあつかったです。外に出て、階段をのぼると、火がもう円の中につけられてあって、近くによるだけでも、あつい空気がムワ〜ときて、ほおが熱くなりました。火おこし体験もすごく楽しかったです。けむりがよくでてきて、けむかったです。ふつう学校ではできない体験ができてとてもよかったです。

（北小5年 坂手彩子さん）

「かん単そう！」という思いから始まった弥生土器作り。けれど、全然かん単じゃなかった。ねん土はすぐにかわきはじめ、それでひびが入り、空気が入り…。こんなにむずかしいんだなあと思い始めてすく思った。けれど、土器を作るのは初めてなんだっ!!と仕方がないと思ってました（最初だけ）。でも、だんだんだんだんつかれる〜とやる気がなくなってきた時、ふとまわりを見ると、みんながんばっていて、私だけか!!と気付き、またがんばりはじめました。その結果、上手ではないけど、一応つぼ(?)みたいなものが2つに土笛が作れました。下手になったけど、まあいっか!!と思いました。下手だったけど、とてもおもしろかったし、いい体験になりました。またしたいです。火おこしは、けむりはいっぱいでしたが、火はでませんでした。むずかしかったです。

（一宮小5年 早瀬悠夏さん）

土器を作るのに、すぐねんどがかたまってしまうので、早く作るように注意しないといけないことがわかって、早く作ったら、ひびがたくさんわれてしまいました。昔は1つの火をおこさせるのが大変だということがわかった。火おこしの道具を思いついたのですくいと思った。火おこしでがんばってやったら、ぜんぜんけむりがでなかったです。となりの人はけむりがたくさん出てすくいなあと思いました。先生にたくさんしてもらったら、何回もけむりが出ました。

（鶴山小6年 小林美佳さん）

土器を作る時、手がよごれて、水をつけるとべとべとしました。それに気をとられて、形をつくるのがむずかしかったです。野焼きの時、暑かったので、もっとすずい時にやってほしいと思いました。「パチッ、パチン」と音がしたので、自分のがわれたのでは…?とびっくりしました。けっかが楽しみです。

（林田小5年 船曳哲世君）

土器を作るひものふとさをちょうせつするのがむずかしかった。先生が「ひもはちょっとづつ作っていったほうがええよ。」という先生と「ひもはいっぺんに作ったほうがええよ。」という先生がいて、どっちの方法でやればいいのか迷ったけど、最後は先生に教えてもらいながらいい作品ができてよかったです。火おこしは、とても力がいり大変でした。ぜんぜんけむりが出ず、何回もちょう戦しても出ませんでした。でも、いっしょにやっていた人はけむりが出ました。なので、うらやましかったです。土器を焼くのは、とても、火がもえあがり熱かったです。いろいろなことが知れてうれしかったです。

（鶴山小5年 小林幸菜さん）

最初に土器を作る時、多分かん単だと思っていました。ところが、作ってみたら難しくて頭の中がこんらんして。それで、先生が「教えてあげようか。」と言って来たので、土器をわたしました。さすがに手なれてるものはずんずん進んでいきました。でも土器はポロポロで水をつけていきました。そしたらやわらかくなり、さんざんでした。2回目の教室は、火を起こして土器を燃やしてくれました。火を起こすのはたいへんでした。なかなかできなくて、うでがいたくなりました。最後のパワーを出したら、木から黒いクズが出てきました。かすかに「ブスブス」と音がしていました。これは火が出る元らしいです。これでできたんだと思いました。大変疲れました。

（高田小5年 松浦輝生君）

昔の人は今のように色々な機械がないのに、火をおこしたり、土器を作ったりするのを良く考えたなと思いました。土器を作ったのは初めてだったので、形が全然ととのっていませんでした。ぼくたちは体験だったけど、昔の人は生活がかかっているから大変なんだらうなと思いました。火の近くは、すごくあつくて、真っ赤になりました。もえた後、すくはあつくてさわるなと言われたけど、昔の人は、さわってはいけないと知るには、だれかがさわってしまったんだな。また作ってみたいです。

（奈義小5年 安藤悠人君）

ろくろのない弥生時代は土器を作るのがたいへんだったことがわかった。土器を作る時にたいへんだったことは、つなぎ目をかくことです。弥生時代の土器作りには、たくさん時間がかかることがわかった。

（高野小5年 松本知春さん）

最初は、むずかしかったけど、集中したらけっこうすみました。初めてだったけど、いい経験になった。とくに、火おこしが楽しかった。土器をやっている時、ちかくにいたら、あせがだらだらでました。土器を作る時すくい力を入れてがんばりました。最後にできたら、ちょっと自分ではへただと思ったけど、すごく楽しかった。ぼくは、火おこしの時、けむりを出すのがつかれたけど、いい経験になりました。花びんを作るのが大変でした。花びんはでっかくしようとしたら、ねん土がたくさんいりました。友達もできました。焼くのは熱かったです。来年もできればいいです。

（高田小5年 佐桑幹人君）

博物館入館案内

- 開館時間：午前9：00～午後5：00
 - 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
 - 入館料：一般 210円（160円）
高校・大学生 150円（120円）
中学生以下 無料
- ※（ ）は30人以上の団体

博物館だより No.56 平成19年10月1日

編集・発行：津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 ㊟(0868)23-9874
E-mail : tsu-haku@tv.t.ne.jp

印刷：株式会社 廣陽本社